

## 救われた気持ち

平成十七年四月二十五日、午前九時二十分、私は、勤務先の大学に行くため、JR福知山線（宝塚線）の三両目の列車に乗っていた。

列車のスピードが上がっていく。女子高校生たちは「ジェットコースターみたい。」と騒いでいた。そして、あとわずかで尼崎駅に到着というとき、突然、「ゴォ。」というけたたましい音が響いた。前の二両目が傾いていく。「あっ、脱線する。」「キヤー。」という悲鳴とともに一瞬おしりが浮き、席から飛ばされた。飛んできた人にもまれるように、ドア付近に倒れた。たくさんの人がのしかかってくる。車輻は進行方向とは逆の方向に回転した。列車が止まってから「痛い。」「助けて。」という声が方々から聞こえてくる。私は、折り重なった乗客の一番下だった。胸が圧迫され身動きが取れなかつた。となりを向くと、一人の青年が倒れていた。「大丈夫ですか。」と声を掛けると私にも「大丈夫ですか。」と声を掛けてくれた。

他の車輻の人が、続々と救助のために駆け付けた。私は、三両目の一番前のドアのすき間から助け出された。外に出ると、ちょうど私の足下に携帯電話が落ちていた。周りには誰もいなくて持ち主も分からない。私の携帯電話もどこにいったのか分からず、私は、とつさに拾って、勤務先の大学と自宅、それから音楽関係の仲間に連絡をした。事故に巻き込まれ、列車が止まったこと、講義や会合に間に合わないことを伝えた。事故直後であり、相手もこんな大きな事故が起きているとは知らず落ち着いて聞いてくれた。

ある方が「ここにいたら危ないですよ。」と声を掛けてくださった。私は、事故現場を離れようとした。でも、足が動かない。一歩も動かない。近くの会社の方が駆け付け、私を病院に運ぶためライトバンに乗せてくださった。車から身を乗り出し「救急、救急。」と叫びながら私を病院に運んでくださった。病院に行く途中、車の中で、先ほど拾った携帯電話が鳴り出した。何回も何回も電話が鳴った。病院に着いてからも続いた。事故の報道を見て、持ち主のことを心配した電話であろう。でも、私は、一回も電話には出なかつた。疲れ切っていて一つ一つに出る返答する元気がなかつたからだ。

そんな中、携帯電話に「母さん」の表示が出た。私は、両親に無事を伝えることができたが、この方は連絡が取れていない。親の気持ちを考えると、しっかりと説明せねばと思い、電話に出た。出た瞬間、お母さんが、「もし、もし、大丈夫！」と叫ばれた。私は、「すみません、実は、列車の事故に遭いまして、連絡の方法がなかつたものですから、落ちていた携帯電話を拾って使わせてもらいました。」と伝えた。「持ち主は、息子さんですか。娘さんですか。」と尋ねると「息子です。」と答えられた。

「あの、息子さんが、今どうなっているか私では分かりません。でも、連絡の手段がなかつたので、申し訳ありませんが、この電話を使わせてもらいました。」と話すところ、そのお母さんが、「どうぞ、お使いください。とにかく、それはどうぞ使ってください。」と言ってくれました。ありがたいなと思つた。「使ってください。」と言われたその一言で救われた気持ちでした。私の携帯電話も誰かがそのように使ってくれていたらいいなと思つた。

病院でのレントゲンの結果、「骨盤が二か所折れている。入院です。」と言われた。使わせてもらった携帯電話は知り合いに頼んで、その日のうちに持ち主のお母さんにお返しした。

入院から一週間、まったく動くことができなかった。「人は一瞬で死ぬんだ。生をまっとうしなければならぬ。自分の時間をどう使うべきか。」ということを日々、考えるようになった。

事故から約一か月後、まだ、完全に治ってはいなかったがどうか退院することができた。携帯電話の持ち主のお母さんにお礼が言いたくて、杖をつきながら自宅に伺つた。「あのときは、本当にありがとうございました。お母様の一言で救われた気がしました。」息子さんは大学生で大学に行く途中に事故に遭われていた。息子さんは比較的元気です。事故当日には家に帰られていた。持ち主の息子さんにも会うことができた。話をして息子の声を聞いて、「どの辺りに乗っていらつしやつたんですか。」と尋ねてみた。なぜなら、「大丈夫ですか。」と声を掛け合つた青年の声に似ていたからだ。「三両目の前です。」「大丈夫ですか。」と声を掛け合つたのを覚えていますか。「ええ、覚えてます。」「それは、私なんですよ。」「えっ、そつだったんですか、はっきり覚えてます。」「あのとこの青年は、大丈夫だろうかと思つていた。その青年に会うことができたのだ。

\* 「救われた気持ち」は、ピアリストの阪本朋子さんが遭遇したJR福知山線の脱線事故についてインタビューした内容を資料化したものです。